

魯迅『孤独者』について

大杉泉子

はじめに

魯迅が『孤独者』を書き終えたのは1925年10月、そしてこの短篇を含む『彷徨』という小説集を出版したのが翌年1926年の8月であった。その年の11月に執筆された「『墳』の後に記す」⁽¹⁾という後書きの中で次のような文が書かれている。

確かに私はしばしば他人を解剖する。しかしもっと多いのは、もっと容赦なく自分自身を解剖することであった。少しばかり発表したら、ひどく温かいのが好きな連中は、もうそれだけで冷酷だといった。もしも私の血や肉を全部さらけ出したら、末路は一体、どういうことになるだろう。

また、『彷徨』とほぼ同時期に書かれた散文詩集『野草』の中の「墓碑銘」⁽²⁾においても、自己をさらけ出そうとする衝動が散文詩という形式を生かしつつ、もっと生々しいイメージを伴なって表現されている。

「一游魂あり、化して長蛇となり、口に毒牙あり。人を噛まずして、自らその身を噛み、ついに殞顛……」

「……心を抉って自ら食し、本味を知らんと欲す。痛み激しくして、本味何ぞ知るを得ん……」

『孤独者』の主人公である魏連受は、作者自身や、作者の知人(范愛農⁽³⁾)などを色濃く投影させ、創り上げた人物と言ってよいだろう。ところが物語りは「私」という冷めた視線の持ち主を語り手に用いて魏連受を観察させ、更には連受に自殺同然の末路を与えている。連受は自虐的行為によって自滅

したが、むしろ自己の分身ともいえる連朶を容赦なく自滅させる作者の姿勢は、よほど自虐的であるように私には思える。

この時期、魯迅は確かに「彷徨」すべき状況を内外から与えられていた。そして、「少しまとまった材料が手に入ると、やはり短編小説を書いたが、もはやひとりぼっちの兵士となり、陣を布くこともできなくなったので、技術は前より少しよくなり、考えもいくらか拘束されなくなったようだが、戦闘の意気込みはすっかり冷めてしまった。新しい戦友はどこにいるか？ そこでこの時期の十一編の作品を集めて印刷に付し、これを『彷徨』と名付け、もうこれからはこんな風でないようにと願った⁽⁴⁾」としている。しかし言い換えるならば「もうこれからはこんな風でないように」「こんな風」な時期を経る必要が、魯迅にはあったのではないだろうか。つまり木山氏⁽⁵⁾が言うところの、「この時期の孤独、懐疑、頹唐、消沈」による「暗い影が、単に折々の心情として作品を彩っているだけ」ではなく、「一時的な心情のあやにはとどまらぬ、根深い思考における」ものとして作品をみななければならないのではないか、ということである。私はその「根深い思考」を、一つは『孤独者』のタイトルが示す「孤独」という面を切り口にすることによって、明らかにしてみたい。それは存在価値すら奪われた如くの、挫折と失敗の過去を背負って半ば投げ遣りに陥っている知識人を題材にして（つまりは魯迅が多少なりとも投影されている人物を語る、資格と余裕を手にして）、民衆と知識人、という対比から登場人物を更に解放し、彼を他と誰とも違う孤独な人間として見つめさせる自由を与えている点にあると考える。もう一つ注目したいのは、自殺同然とはいえ連朶の行動が単なる自滅で済まされていないことである。作者は連朶に倒錯こそすれ復讐をするだけのエネルギーを与えて、現実よりも現実らしい小説という虚構の世界において可能な限りの試みをさせている。要するにこの時期、魯迅は最も文学者であったのではないか、というのが私の意見である。

(一)

魯迅の執筆活動の中で、雑感ではなく創作集、といえ、『呐喊』『彷徨』『野草』『故事新編』『朝花夕拾』の五つが挙げられる。しかし『野草』は「少し誇張して言えば、つまり散文詩」であり、『故事新編』『朝花夕拾』は「前者は神話、伝説および史実を物語ったものだし、後者は回憶の記事⁽⁶⁾」であるため、純粹な小説集は『呐喊』と『彷徨』のみである。『狂人日記』『阿Q正伝』などを収める『呐喊』の諸作品では、中国の暗黒社会の病根を暴露することによって注意を喚起し、また民衆と革命家との埋めがたい隔絶が描かれた。第二の短編集『彷徨』に収められている『孤独者』においてもまず強調されるのは、依然として封建的な制度に麻痺しきった人々と、主人公の魏連受との間に横たわる溝の深さである。

『孤独者』という短篇は、特に冒頭に「異様」「奇怪」といった類の言葉が目立つ。それらは全て、魏連受を噂する際に舞台となるS市や寒石山の人々が好んで使用する形容詞である。S市の人々にとって連受は「古怪」であり、連受の同族は一層彼をわかっておらず彼を外国人扱いして「異類」「異様」さを感じる。そしてこの「異様」というレッテルは彼らの中に起こるべき問題を有耶無耶にするために、連受を彼らにとっての対等な人間から引きずり降ろす策に他ならない。つまり「不安を掻き立てる人物はうわさによって集団的負担とし、それによって危険は薄められ、抑圧から解放される⁽⁷⁾」ことを象徴する言葉であり、連受は彼らにとって暇つぶしの材料となるだけでなく必要悪としても利用されている。

それでも違和感のある人物が変革を迫る契機は、例えば連受の親戚が葬式の式次第を連受に強制する場面で訪れた。

連受は、顔色も変えずに、ぼそっと一言答えた。

「みんな結構です」

「これはまた、彼らにとっては意外千万なことである。人々は、心の重荷が降りはしたものの、かえって重くなったような気もするのである。あまりにも「異様」すぎて、どうも気がかりなのだ (引用中のカギ括弧は筆者の手によるもの)。

同じような場面は早く『呐喊』の中の『薬』の一場面においても出てきている⁽⁸⁾。店に集う人々は思いがけない疑問を突き詰める勇気が無く、緊張に耐えきれずに何はともあれ「気が違ったんだ」という出口を求めるのだが、ここでの「気が違った」は「異様」と同じ役割を果たしている。連朶の孤独の一つは「奇怪」「異様」という反応を示すことでコミュニケーションを一方的に断ち切る人々との深い断絶にあり、簡単に越えたり埋め合わせたりできないものなのである。

私が魏連朶と知り合ったのは、思い出してみるとかなり風変わりであった。つまり、葬式に始まって葬式に終わっているのである。

『孤独者』はそのタイトルや書き出しからすでに描き出される世界が暗示されてはいるが、物語りを覆うその暗さの中にも幾分乾いた軽さのようなものが、私には感じとられる。その理由として、例えば「葬式に始まって葬式に終わっている」そのそれぞれの葬式が、背後に臨終の場面を背負っていないことを挙げたい。連朶は祖母の臨終に関わっておらず、「私」は連朶の臨終に立ち会っていない。この三人の孤独者が、臨終という「お互いの心と心の出会いを可能にするもっとも基本的な場」であり「生前の絆が清算されたり解放される機会⁽⁹⁾」を与えられない設定になっているのである。また、連朶の子供に関する逼迫した態度は「私」に軽く受け流されてしまうし、彼の「私」個人に向けられた長い語りは孤独な魂がアイデンティティを確認する行為と理解していいだろうが⁽¹⁰⁾それは独白に近い形であり、最後の連朶の言葉は手紙を媒介とした形でしか受けとめられない。そして連朶が祖母との間に同じ運命を発見したとき彼女はもうこの世にいない。彼らは共同体から疎外されるだけでなく、本来仲間や理解者となるべき人とも融解もしくは一体感をもてず、寄り添うことのないその孤独に深みを加えている。

『祝福』は『彷徨』の冒頭を飾る作品で、「中国の儒教的道徳通念が、いかに弱い者、ことにその代表者である寡婦の上に、残酷な運命をもたらすか言おうとしている。祥林嫂の再婚を不道徳なこととして、彼女を許さなかった

魯家の主人は別段悪人ではない。むしろ真面目な朱子学者であり、道德家である。その奉ずる道德の故に、哀れな女の運命の苦を更に加え⁽¹¹⁾ていることを問題にした力作である。しかし語り手の「私」の役割はただ祥林嫂の悲惨な運命を回想するだけではない。「私」は彼女と直接顔を合わせ、彼女の突然輝きだした視線にたじろぎ、彼女の矢継ぎ早の質問に答えられずに逃げ出すしかない場面が挿入されているのである。「私」は彼女への情動の働きを禁じられて、カタルシスを得る権利を放棄させられている。それは「祥林嫂は「私」の中に熱い同情の発動を許さず、跳ね返された「私」の視線が、自身の中に見いだすものは、我が身の石ころのような孤独⁽¹²⁾」であった。作者の意図は、かえって孤独感が研ぎすまされていくのは「私」であることを自覚することにもあり、それは『孤独者』の乾いた基調に通じるものとして無視してはいけない面である。

『孤独者』の連父の祖母も、一方的な疎外の受け手という意味では同じ立場である。しかし連父の祖母は祥林嫂とは違い、自覚して運命を生き抜く道を選択するため、他人の共感をより強くはじき返す孤独を完成させている。

周囲から遺棄された連父の祖母は、悲哀を封印するために「我と我が手で孤独の繭を作りだし」、針仕事に没頭することによって精神的苦痛や悲哀を麻痺させる。人間らしい表現活動を自ら一切封じ込めた彼女は、生きながら死んでいるとあってよい。感情を抑圧した彼女にとって、麻酔を打ち破る可能性の強い他人との接触は危険そのものであり、連父への冷たい態度もそこに訳があった。

「私」はこの物語りのストーリーテラーだが、「私」の語り口はその冷静さに特徴がある。後に連父と頻繁に交遊するようになってもその感情を押さえた態度は変わらない。連父が職を切られたときも「これとて昔からそうだったので」「S市の人が今回に限って特にひどかったわけではない」と語る、冷めた認識が根底にある。「私」は連父に最も近づける人物でありながら心の内を開いて慰め合うことを拒否しているのは、やはり彼の問いかけをはぐらかさなければいけないほどの苦い認識が存在するためであろう。「私」の冷静な態度も、連父の頗る奇警な議論をまくしたてる行為も、連父の祖母の機械

のような生き様も、現れ方は異なっても源は同じである。「私」と魏連受は幾度も接近しつつ、しかし二人は孤独な者同志として離別することは、「私」が耳からもらった連受の嘆き（「手傷を負った狼が、深夜の荒野に吠え狂うように、痛惨の内に憤りと悲しみを交えた声」）を消化して口から出すことなく、耳からそのまま帰すことに象徴されているのではないか、と私は考える。

連受が空虚感を憎しみで埋め、「僕の生きることを希望しないもののためだけに」自分の残りの命を費やすためには、更に完全な孤独が条件であった。それは「僕がもうしばらく生きることを希望」する人がいなくなることである。このことは次のような魯迅の文章が参考になる。

自分と関係のあるものが生きているときは私は安心できない。死んでしまえば安心します⁽¹³⁾。

たいていの人には愛する人が涙を流すことを欲しない。涙のない人間は血もいらぬ。一切の彼のためにされる嘆きと滅亡を拒絶する⁽¹⁴⁾

そして連受は血のつながりが無かったにせよたった一人の家族を亡くした天涯孤独の身の上かつ、自らの意志に基づき結婚をして子供を作ろうとしない人物である。子供がいぬということが中国人にとってもつ意味は大きく、我々が想像する以上に、人に孤独感を想起させる度合いが高いことを指摘せねばならない。

中国の旧社会は、祭り祭られる関係を継続させることが基本となる宗族の集合体であった。結婚は家の血統を継続させるためであり、祖先を祭り自らも祭られるために子孫を作らないということは最大の不幸とされた。

中国人は男子を得ることに強い執着をもつ。男子系の絶えることは「無後」「絶嗣」などといはれ、そのもつとも忌むところである⁽¹⁵⁾。

祖先を祭る義務は翻って資格でもあった。それは故人が子孫の捧げる供物を食して生き続ける、という観念より生じるものであり、自己が祖先に対して負う義務と同様の義務を、自己の死後、子が継続することが約束され、宗教的つながりが連綿と存続するからである。このように重大な意味をもつ後

継ぎの有無を放棄して孤独者となる連受の行動を、人々が（特に連受の葬式で大良の祖母が）理解に苦しみ「異様」だ、とうわさするのは当然のことであつた。

子供に関連する文章と言え、私は『狂人日記』の最後に唐突に発せられる「子供を救え！」という叫びを思い起こす。『狂人日記』は魯迅にとって、「意図は家族制度と礼教の弊害を暴くことにあつた（中国新文学大系、小説二集序言）」としながら、「日記部分13節全体の中でこれが早くも第3節で出てしまうということに、文学作品を読み慣れた現代の読者達は、割り切れぬものを感じる⁽¹⁶⁾」展開になっている。それは、知らぬ間に目覚めた人間をも暗黒の輪へと引きずり込んでしまう暗黒社会の恐ろしさを強調するものだが、裏返しに「この短篇で「食人」という罪を民衆とあえて共有することにより、魯迅は状況に向かつて限りなく開かれた自我を獲得したといえよう⁽¹⁷⁾」とする藤井氏の指摘は重視したい。人間不信と現実否定による絶望と、それに耐えて希望を説く力は、この頃から波長を変えつつも振動しあっていたのである。よって『狂人日記』からの魯迅は己の歩行に疑いを抱きながら「鉾先はひたすら老人、旧の側に向けられ、自らもその一員とする旧社会を、自らとともに葬り去ることで新しい世代に新しい世界を開いてやる⁽¹⁸⁾」位置に立って、その頃『新青年』で発表していった「随感録」の随所で見られるように、

ただこのまま一代を犠牲にすることによって、四千年の古い帳簿に締めくくりを付けるばかりだ⁽¹⁹⁾。

老いたものが道を譲り、催促し、奨励して若い者達に歩かせる。道に深い淵があつたら、彼らの死でそれを埋めて平らにして、若い者達に歩かせる⁽²⁰⁾

といった役割を担うものだった。

『孤独者』の魏連受の子供への態度は、魯迅自身のそれへの姿勢の変遷と近似している。『孤独者』に戻れば、連受の人間嫌いは相当であり冷ややかでなかなか感情を外に出さない人物であるにも関わらず、例えば初対面の客を

放ったらかしたまま飛び出していくほど、彼は当初子供好きであった。そして彼が子供に情熱を傾けるのは現実に失望している裏返しであり、機会を捕らえて「私」をわざわざ説得しようとするほど逼迫したのもであった。

「何ととっても、子供は良いね。まったく天真だから……」

「大人の悪い癖は、子供にはないよ。後天的な欠点、君が普段攻撃するような欠点は、環境がそうさせるだけさ。先天的には決して悪くない。天真さ……僕は、中国に希望が生まれるとすれば、この点だけだろうと思う」

実際、連受の子供に対する「自分の命より大事なような」態度は異常で、献身的に尽くすのみでその存在が子供と平等な関係すら持ち得ないほどである。それは「実状を変えるためには全てを破壊することでしか見いだせないほど絶望している⁽²¹⁾」故であり、このような姿は

自分は、因習の重荷を担い、暗黒の水門の扉を肩に支えて、彼らを広々とした光明の場所へ放してやり……時には自己を犠牲にしても、その将来の生命を発展の長い旅路へ進ませることにある⁽²²⁾。

という魯迅が主張した内容と重なる。

しかし、大良の祖母が連受の死に際してその頃の連受を「あの方、昔は子供を怖がることといたら、子供が父親を怖がるよりひどうござんしてね、びくびく小声で口をきいたものでした」と批評するが、彼（ひいては魯迅自身）の切実な行動が実際には怯えた姿でしか映らないことも容赦なく分析されている。連受の思想は破綻し、「僕の家には今、実に嫌な奴が大人一人と子供一人、いるんだ。まるで畜生だ」と認識するまでに変化する。その変化は幾分速すぎるテンポで展開するように私には感じられるが、それは連受の思想が作者である魯迅自身の体験をえぐり出すものでもあるために、自身の心痛を顧慮して駆け足で通り過ぎているのではないか、と想像している。

社会とのコミュニケーションを断たれながらこちらからも距離を取り、愛情と執着を生み出す家族の存在を積極的に放棄した魏連受は自分自身のその姿を「(僕は今度こそ本当に失敗した)……そして勝利したのだ」と高らかに叫ぶ。連受の孤独が「勝利」に値するのは、片山氏が指摘するようにたと

え「反抗」と「行動」の失敗者、傷まみれの反社会的敗残者に終わろうと、魯迅は「他人の苦痛を賞玩し慰安にする」ところの「傍観者」よりもはるかに高く評価を与えているからである⁽²³⁾。

『孤独者』における「孤独」とは、「孤独との対立においてその幸福が語られることが常である集団」を越え、家族を越え、「共通の何者か（理想など）をめぐって隣り合わせたり、引率したりされたりする仲」を越えて、「自分が自分自身でしかあり得ない」ような、自分自身との絆の深さを自覚するものであったと、私は考える⁽²⁴⁾。『孤独者』には魯迅自身の体験が多く盛り込まれているが⁽²⁵⁾、それは孤独をより掘り下げるための作者自身の運動が根底にあったからであろう。よって、この孤独は決して不幸ではなく、すなわち魯迅が心酔したニーチェやバイロン等悪魔派詩人の文学に流れ、かつ主題でもあった威厳ある孤独が与える感動に近づくものである。魯迅は『摩羅詩力説』においてバイロンの『マンフレッド』の中の一節「俺自身が俺の破壊者だったのだ。帰れ、悪魔達よ。死の手は、いかにも俺の上にある。だが、お前の手ではないのだ。」を引き、「その意味は、自己が善や悪を抱いているのだから、褒へん賞罰もやはり全て自己の責任で行うのだ。」と説明している。連爰は「今度こそ完全に失敗した」が、それによって迫害された知識人を越える一人の「孤独者」として、「俺自身が俺の破壊者」である固有の滅亡への運動を与えられたのである。

(二)

魯迅は連爰の行為を自虐的な復讐として描き、そのような復讐が現状を変更する力を持ち得ないものとして、「私」に別れを告げさせている。しかし、この時期魯迅が復讐という観念に強い共感を寄せていたことに間違いはなく、復讐に関連した文章を度々語るようになる。

魯迅は日本留学中に執筆した『摩羅詩力説⁽²⁶⁾』において、すでに復讐について述べているけれども、そこに述べられている復讐の指す内容は、「全て神

と人ともに追いつめられた人民は、その父祖の国を救うためには、いかなる術策を用いてもかまわない。それこそ神聖な法である」というものであり、『彷徨』執筆時の魯迅が関心を持った復讐とはやや基調の異なるものではあった。例えばポーランド人の、ロシア皇帝に対する報復の歌が載せられている。

「わしの霊は、すでに生臭い血の匂いを嗅いで、吸血蝙蝠のように叫んで起ち、人の血を欲している。血に渴く。復讐、復讐！ 我が虐殺者に復讐せよ。それが天意でないとしても、やはり復讐しよう」

どのような方法でも、たとえ天意でなくとも「神聖な法」となるのは祖国のためだからであり、この時の「魯迅の解釈は、現在の清朝の支配者満州族に対して、祖先の仇を今報復することの正当性を擁護する意図⁽²⁷⁾」を背景とした、救国のための復讐観であった。

とはいえ、悪魔派詩人バイロン等魯迅が中国において出現を希求した孤高の英雄達は、いつにおいても民衆の反応を得られないばかりかかえって虐待や慰みの対象となることもすでに言及はされている。

その後魯迅は、辛亥革命を名ばかりのものとして風化させる中国の国民性の問題に突き当たり、「国民が自分で自分の悪い根性を改革する」「国民性の改革⁽²⁸⁾」の困難さに挫折感を味わったのだが、それが魯迅をして復讐について再び関心をもつようにせしめたのは、徐々に寂寞に陥り、救済すべき民衆が復讐の対象と同一である、という認識を深化させた時期だったからである。彼らの幸福を願って生命をすり減らす改革者が、逆に孤立させられて、あげく迫害を受けるとき、復讐は「救国のため」という大義名分を捨て去り、個人的な問題へと収斂されていくのである。『孤独者』の魏連殳が復讐を選択した動機も、おおよそこの延長線上にあるといえよう。

挫折した改革者が、一向に目覚めることのない民衆へ憎悪を抱き、それどころか改革者を追いつめる行為に荷担する事実に対して復讐を敢行する、という構図を魯迅に強く印象づけたものとして、ロシアの作家アルツィバーシェフの『労働者セヴィリョフ』を指摘する人は多い⁽²⁹⁾。魯迅はこの中編小説を独語版より重訳した。1921年7月から12月まで『小説月報』に連載されたのち、単行本として出版されている⁽³⁰⁾。

『労働者セヴィリョフ』はロシア革命を背景とした、改革者セヴィリョフと群衆との、隔絶と悲劇を描いた作品である。セヴィリョフは官憲の目を逃れながら、ロシアの改革のために生涯を犠牲に奮闘していた。しかしとうとう追いつめられ劇場に逃げ込む。その間彼をかまう人は一人もおらず、かえって警察と一緒にセヴィリョフを捕らえようとさえするのだった。劇場の中では壇上の歌手に向かって観客が拍手喝采している。怒りのあまりセヴィリョフは倒錯した復讐を決意する。セヴィリョフは全てを犠牲にして尽くした民衆に向かって、ピストルを無差別に発射するのだった。

魯迅がこの小説の訳を決心したのは、セヴィリョフに深い共感を覚えたからである。

(『労働者セヴィリョフ』は、) その時に整理していたドイツ語の書物の中から選び出したものだからです。そのうず高い書物の中には文学書が常にたくさんあったのにどうしてその時とくにこの一編を選んだのかといいますが、その意味は、今ではもう記憶ははっきりしていませんが、多分こうです。民国以前及び以後に、我々の国にはたくさんの改革者がいたのですが、その境遇はセヴィリョフととてもよく似ているように思ったので、他人の杯を借りることにしたのだらうと思います⁽³¹⁾。

と動機を説明し、将来にも彼のような改革者は存在し続けるだらうと述べている。

魯迅は一貫して、改革を受けつけないばかりか同胞の犠牲者を暇つぶしとして慰めにしてしまう中国人の国民性を鋭く指摘してきたし、彼らがいつまでたっても主体的になれずに傍観者でしかあり得ない姿を、「雑感」や小説の中で幾度も表現していた。そして魯迅の確信する絶望的な状況が『労働者セヴィリョフ』と近似しているように感じたという。よって『労働者セヴィリョフ』は、魯迅をして憎み復讐するという行動にまで結晶せしめる推進力を内包していたのではないか、と考えられるだらう。もちろん魯迅は有効な手段を作り出せない自分への内省の矢印を同時にもつ人物であったし、復讐は

現状の解決にはならないことも承知していた。文章においても、

しかしセヴィリョフの最後の思想はあまりにも恐るべきものであります。彼は初めは社会のために働きましたが、社会は彼を迫害したのです。それどころか彼を殺害しようとさえしました。そこで彼は一変して社会に復讐するようになったのです。一切が仇敵であり、一切が破壊でありました。中国にはこのように一切を破壊する人間はまだ見あたりませんし、多分無い筈だと思います。私もそんな人の出ることを希望はいたしません。私たちはいつも破壊される側です。私たちは破壊されながらもそれを修理して辛抱苦勞してやって行くわけです⁽³²⁾。

この根本状態を徹底的に破壊しようとするればどうしても「個人的無政府主義者」になりかねない。『労働者セヴィリョフ』に描かれたセヴィリョフのようなものです。この種の人物の運命は今日のところ或いは将来といえども、大衆を救おうとしてかえって大衆から迫害されしまいに孤独となり憤激のあまり転じて、一切を敵視するようになり、誰彼見境無く発砲し自分も破滅してしまうのがおちなのです⁽³³⁾。

と表現して、破壊行動の無意味さを説き、衝動の危機を回避している。けれども「憤激」というエネルギーの存在自体は肯定していたであろう。「破壊されながらもそれを修理して辛抱苦勞してやっていく」のは決意した上でも苦難に満ちた歩行であろうし、時には「自分が裁判し、自分で執行⁽³⁴⁾」したい衝動に駆られることもあったのである。魯迅はセヴィリョフのような復讐の方式に共感と回避を説きつつ、『孤独者』という創作においては多少異なる形で実現を試みることとなった。

復讐という目的を正当化しその目的を達成するための手段を講じる場合、私は二つのタイプがあると考えている。一つは相手から受けただけのダメージを同じだけ目に見える形で報復するものであり、セヴィリョフの行動はこの範疇になる。もう一つは「忘却に勝る復讐はない（グラシアン・イ・モラレス）」という言葉に象徴されるような、精神的ダメージをめぐるもので、連受の屈折した行動はこちらに近いと思われるので以下具体的にその仕組みをみていきたい。

『孤独者』の中にはいくつか連爰の復讐劇と取れる場面があるが、連爰の祖母の葬式の場面もそうである。寒石山の村人にとって連爰は「外国かぶれ」の「新党」である。よって連爰はきっと葬儀を新しい様式に変えようとして、旧式にこだわる親戚と争い事を起こすであろうと思われた。つまり彼らにとってこの葬式は、心待ちにすべきイベントであった。しかし連爰は意外にも「皆結構です」とすんなり承諾して、彼らを失望させる。連爰は自分が村人の期待を高める張本人であることを承知の上で、その期待をそぎ、彼らに無駄足を踏ませることによって復讐しているのである。

大衆——ことに中国の——というものは、永久に芝居の観客であります。犠牲が登場する。もしそれが悲壯に見えれば彼らは悲劇を見たわけだし、滑稽に見えれば喜劇を見たわけであります。……このような大衆に対しましては、その見る芝居を無くしてしまうより方法がないので、その方がかえって救済になります⁽³⁵⁾。

魯迅がこのような国民性の認識を告発するのは枚挙に暇がない。だが、『孤独者』前後の魯迅は、傍観者の存在を憎しみにまで高めて復讐しようとする情動が激しい。同時期に書かれた散文詩集『野草』の中に収められている『復讐』が例えばそれである。

荒野に二人の人間が全身を裸にし、手に剣を握り、相対して立つ。彼らは「懸命になって、接近と、接吻と、抱擁とを求め、生命の酣酔の大歓喜を得よう」と求め、また「一口の尖った利剣をもって、一撃のもとにこの桃色の薄い皮膚を突き刺す」ことによりお互いが「生命の飛躍の極致の大歓喜中に」浸ろうとする。人々は殺戮か抱擁を鑑賞するために集まってくる。しかし彼の二人は行動を起こさない。観客は退屈のあまり生気を失うまでに枯渴を味わされたかのように散っていく。二人はそのような観客を見届けることによって、復讐を成し遂げるのである。

二人は己の肉体も枯渴してしまうことを知りつつ、自ら進んで舞台上上がり、復讐を行う。けれどもこの方法はセヴィリョフのような直接的な行動で

はない。復讐される観客と、復讐を計画し実行する二人を比べれば、犠牲度があまりにも釣り合わないであろう。そのせいか「生命の飛躍の極致の大歓喜」という語を短い詩の中に三度も使用し、更に観客の枯渇の仕方を過剰に表現することによって、埋め合わせようとしているように、私には思われる。

退屈が彼らの毛穴から忍び込むような気がする。退屈が彼ら自身の心中から毛穴を通して這い出し、荒野に広がり、また他人の毛穴へ忍び込むような気がする。まるで生気を失うまでに枯渇を味わされたかのように。

「生気を失う」という表現は、観客の徒労が最大限にまで達したことをイメージさせ、二人は彼らのその様子を「死人のような眼光をもって」見届けるのだが、やはりこれはイメージの世界の中だけなのであって、連朶が現実に戻って実行してみれば、「生命の飛躍の極致の大歓喜に永遠に浸り続ける」状況など、どこにも見あたらないし作りだし得ない。

魯迅は『復讐』を書いたその日に、『復讐（その二）』を書き上げる。魯迅はここでは民衆のイメージを更に凶悪に仕立て上げることによって、復讐の意義を問う。

キリストが十字架にかけられる。周囲は「哀れむべき、呪うべき」人々である。彼らは、ただの傍観者ではない。自分たちのために犠牲となったキリストを喜んで釘付け、罵り、祭司長や学者らよりもはるかに冷酷な「暴君の臣民」である。

キリストの復讐は、哀れむべき呪うべき民衆の姿を見届け、「人の子」を釘付けた人々の体は、「神の子」を釘付けたものよりも血生臭く汚れて」と表現されるべき、彼らの醜い姿を告発することによって成し遂げられる。しかもその姿を堪能できるのはキリストのみで当の民衆は一向に自覚しないため、復讐はキリストの自己満足にのみ完結するよりほかはない。『孤独者』の連朶の行動も、同じ系統に位置づけできよう。

連朶は軍閥の顧問になって、今まで自分を迫害した人々に復讐をしようと

する。連朶の周囲で抜け目無く豹変し、悪びれもせず追従する人々は、『復讐 (その二)』での「血生臭く汚れている」イスラエルの民衆のイメージと重なるだろう。昔連朶を攻撃する匿名の記事を載せた新聞も、彼に不利をもたらせる流言をしきりにしていた学界の人物達も、あれほど「異様」だ、「奇怪」だ、と連朶を謗った人々も大良達や大良の祖母も、その卑屈さを奉じる悪びれのなさは、賛嘆に値するほど鮮やかである。

『復讐 (その二)』で、キリストは民衆の軽蔑すべき姿をはっきり見届けるために没薬を混ぜた葡萄酒を飲まなかった。連朶が心と肉体を切り放し、肉体を追いつめてまでその精神をますます研ぎすませるような態度をなぜ選択したのかは、キリストに託して魯迅が表現した精神のあり方によっても、類推することができるだろう。

魯迅の民衆観はその憎しみが時には復讐の願望まで高まり⁽³⁶⁾、

私は特別根性曲がりのせい、未だに昔の環境の影響から抜け出せないせい、知らぬが、復讐というものはなんら奇とするに足りない気がする……一体誰が裁判するのか、どうすれば公平に行くだろうか？ そしてすぐまた自答する。自分で裁判し、自分で執行するのだ。

と、その心情を吐露した。それは『野草』という散文詩の世界では激しい興奮となって表現されたけれども、やはり現実を変える力とはなり得ない。魯迅が『孤独者』という小説(虚構)の世界において復讐を試みようとしても、連朶を「死んでから誰一人泣く人のいない」「生きてゆく資格のない」完全な「孤独者」にしなければ実行させることはできなかつた。しかもセヴィリョフとは異なる屈折した復讐であった。積極的に彼らの期待を裏切ったつもりが己を嘲笑するしかない結末となった、連朶によって確認されたその『孤独者』での経験から、復讐の道への一応のピリオドを打とうとしたのだと私は考える。

進取的な国民の中では性急さもけっこうだが、中国のような麻醉した場所に生まれた以上、それでは損するだけです。どんなに犠牲を払ったところで、自分を滅ぼすのがせいぜい、国の状態には影響がありません

(37)。

私が「一応」と述べたのは、復讐という行為よりも復讐にまで高められたその強いエネルギーの発現を重視したいからなのであるが、例えば『野草』が詩という表現形式を借りて編まれたことは注目に値する⁽³⁸⁾。冒頭で述べたとおり、この時期の魯迅は寂寞を募らせる要因が内外に充実しており、それは1923年から1924年夏頃までの執筆エネルギーの低下もしくは停止がめだつことによってもよく指摘されることである⁽³⁹⁾。その原因をいくつか推測するならば、まずは同志であり仲の良い弟である周作人との不和事件とそれにまつわる家捜しなどの生活上の煩わしさが挙げられる。そして当時魯迅の住む北京は軍閥の割拠状態による内戦状態がつづいており、辛亥革命が過去の産物に風化してしまうほど殺伐とした雰囲気は、魯迅の意気を消沈させるに余りあるものだったに違いない。さらにはこの時期に魯迅が五四の反動期を迎えた状況にあったことは、魯迅に精神的な迷いを引き起こす大きな原因の一つとなった。何度か引用した『自選集自序』においては以下のように語られる。

その後新青年という団体は解散して、あるものは出世し、あるものは引退し、あるものは前進した。私は同じ陣営内の戦友にもやはりこんな変化があり得るものだということをまたしても経験した。

文化界の革新勢力が1920年辺りから次第に分裂していく過程は、魯迅の足を一時留まらせるほどの危機があった。

私が、これまで経験したことのない味気なさを感じるようになったのは、それ以後のことである。初め私は、なぜそうであるかがわからなかった。後になって考えたことは、全て人の主張は賛成されれば前進を促すし、反対されれば奮闘を促すのである。ところが、見知らぬ人々の間で叫んで相手に一向反応がない場合、賛成でもなければ反対でもない場合、あたかもはてしれぬ荒野に身を置いたように、手をどうしていいかわからないのである。これは何と悲しいことであろう。

これは有名な『呐喊』自序の一節である。無意味な作業に自己の精神を集

中させる麻醉療法の下りは『孤独者』の内容を髣髴とさせるが、これは十数年前の新生事件の話でありながら、同時に1922年12月における魯迅の現在の心境でもあった⁽⁴⁰⁾。この時期の魯迅の文章も基調が一様に沈みがちであり、『ロシア歌劇団のために⁽⁴¹⁾』では「ある人」の言葉に反応して北京の様子を次のように述べる。

そうだ砂漠がここにある

花もない、詩もない、光もない、熱もない。芸術もなければ、趣味もない、それに好奇心さえもない。

重く沈んだ砂漠……

『狂人日記』がすでに深い懷疑を抱きつつ歩き始めた魯迅によって執筆されたものだったが、自分を旧社会の人間として局限しつつ若い世代のために「吶喊」を揚げてきた魯迅にとって、希望を叫ぶ声が下火となり人々が散り散りに離れてゆく状況を迎えることは、自己を照らし出す鏡を失ってしまうことでもあった。深い絶望を棚上げしてまで存在させた未来を失ったと感じる時、過去と現在にのみ繋がる自己の生命は到達点を失い、何の目的もない覚醒状態から抜け出ることのできない、不眠症のような苦しみを魯迅は味わったのではないだろうか。その存在価値を手軽に自覚させてくれる「他人の存在」が無い今、自分で自分を掘り下げることによって、「個」の手応えを確認する苦しい作業に沈んだのである。

『彷徨』とほぼ並行して書かれた『野草』では、明と暗、希望と絶望、友と敵、生と死といった対立項が目立って表現されている。それは魯迅が「孤独」を深める行為の中からその対立を明確にするほどのエネルギーを生み出そうとする精神の働きが基になっているのであり、例えば『影の告別』において明と暗の境に立つ「影」は、明も暗もそれぞれに魅力がないばかりかどちらの存在も影を跳ね返すだけの力さえ失っているからこそ、嘆くのである。『希望』では青年達の安らかさが、私に「不明不暗のこの「虚妄」のうちに生をぬすむ」ことを困難にしていることが述べられる。

のちに魯迅は本当の「敵」を見定めて「僕の生きることを希望しないもの

のためだけでも、自分が生きなければならぬ」という連発の吐いた言葉を我がものとすることによって『彷徨』を終えることとなる。それは、「私は往々にして、自分の嫌う人に嫌われる人を、良い人だと思ふときがある⁽⁴²⁾」と言いつ切る姿であり、

もしも今後なお光明と暗黒とが徹底的戦闘を行い得ず、正直な人間が、悪を許すことを寛容と思ひ誤って、悪戯に姑息のみを事とするならば、現在のごとき混沌状態は無限に続くことであろう⁽⁴³⁾。

従って私は昨日決めたのです。いかに青年であろうと、今後は情状を酌量すまい……実状を暴露してやろう……辛辣な文を書いてやろう……私は決心しました。もう彷徨すまい。拳来たらば拳で迎え、刀来たらば刀で受けよう。お陰で気持ちがさばさばしました⁽⁴⁴⁾。

といった力強い宣言をする魯迅の誕生であったが、それは『孤独者』の創造における、現実へのとっかかりを奪うための孤独への沈潜と試行があったからであると、私は考えるのである。

終わりに

自分の体験に深さを賦与しようとするのは、その体験の内容によっては相当つらい努力でもある。取り出すというより抉りだし、消化し、自己の歴史の一部として組み入れる努力を行ったのがこの時期の魯迅であると私は考える。彼は自身の寂寞を都合よく加工したり不快な部分を溶解したり等、麻醉療法を施す行為から、確実に自分の遺産として継承するためその意識化を徹底させ、具体的な現れの一つが『孤独者』となって表現された。

私は一つの終点だけを確実に知っている。それは墓だ⁽⁴⁵⁾。

魯迅は終着点だけは知っているがそこまでの道のりがわからないと述べている。しかし私の目には魯迅の行為が墓を目指して歩く、というよりも幾つも幾つも墓を作ってひとときの記念としては、また次の墓を作るために歩き出す行為として映るように思われてならない。そして『孤独者』という作品も、彼が彷徨したことの証として建てられていると思えるのである。

参考文献

- (1) 『墳』『墳のあとに記す』 1926
- (2) 『野草』『墓碑銘』 1925
- (3) 周作人の『魯迅小説里的人物』(1981人民文学出版社)によると、魏連受や呂緯甫の性格は范愛農にいくらか似ているとある。魯迅はこの人物を『朝花夕拾』『范愛農』において多少の虚構を加えつつ回想している。魯迅の范愛農への複雑な思いが作品に影響を与えていることは確かだがここでは重視しない。
- (4) 『南腔北調集』『自選集自序』 1932
- (5) 『『野草』的形成の論理ならびに方法について—魯迅の詩と哲学の時代—』
1963 東洋文化研究所紀要30
- (6) 前出(4)
- (7) 『うわさ—もっとも古いメディア』 J・Nカプフェレ 法政大出版 ユニベルシタス叢書
- (8) 『呐喊』『藥』の一場で、明け方に処刑された革命家をめぐって人々が騒ぐ中、革命家の「気の毒だ」という言葉をきいて一瞬雰囲気凍り付く場面がある。
- (9) 『対象喪失—悲しむということ—』 小此木啓吾 中公新書557 1979
- (10) 同じく『彷徨』に収められている『酒楼にて』で魏連受と近似した人物、呂緯甫が「私」に思い出を語る場面がある。
- (11) 『『祝福』が書かれた頃』 目加田誠 東京支那学報第13号
- (12) 前出(5)
- (13) 『两地書』24 1925
- (14) 『華蓋集』『雜感』 1925
- (15) 『中国家族法論』 滋賀秀三 昭和25 弘文堂
『中国家族法の原理』 滋賀秀三 1969 創文社
- (16) 『魯迅における『狂人日記』の位置』 牧戸和宏 『野草』23 1979
- (17) 『魯迅『故郷』の風景』 藤井省三 1986 平凡社選書
- (18) 『魯迅—その文学と革命』 丸山昇 1965 東洋文庫47
- (19) 『熱風』『随感録40』 1919

- (20) 『熱風』『随感録49』 1919
- (21) 前出(18)
- (22) 『墳』『我々は今日どのように父親となるか』 1919
- (23) 『時間と他者』 エマニュエル・レヴィナス 法政大出版 ウニベルシタス叢書より引用
- (24) 前出(23)
- (25) 周作人の『魯迅小説里的人物』(前出)によると、連受の祖母の葬式の場面は魯迅自身の体験とそっくりで、范愛農のみならず祖母にもほぼ同様のモデルがある、との指摘がある。また時代設定も『沈淪』出版が1921であることを考えると、『孤独者』執筆当時がほぼそのまま舞台背景となっている。
- (26) 『墳』『摩羅詩力説』 1907
- (27) 『魯迅『労働者セヴィリョフ』との出会い(試論)(上・下)』 中井政喜 『野草』23・24 1979
- (28) 『两地書』8 1925
- (29) 『魯迅『孤独者』覚え書き』 中井政喜 名古屋大学中文論集3 1979
『魯迅の復讐観について』 中井政喜 『野草』26 1980
『魯迅とアルツィバーシェフ・日本におけるアルツィバーシェフの受容との比較から』 野村邦近 1986 新田大作編中国思想研究論集
『『彷徨』分析』 許欽文 1958 香港文采出版社 など
- (30) 『『労働者セヴィリョフ』を訳して』 1921 原注1
- (31) 『華蓋集・続編』『談話ノート』 1926
- (32) 前出(15)
- (33) 『两地書』4 1925
- (34) 『墳』『雜憶』 1925
- (35) 『墳』『ノラは家出をしてからどうなったか』 1923 北京女子高等師範学校文芸会での講演
- (36) 前出(34)
- (37) 『两地書』12 1925
- (38) 『今日の抒情詩について』(村野四郎 現代詩論本 昭和29)において、詩と

魯迅『孤独者』について (大杉)

は「情緒の流れを邪魔するような反省、推理、批判などの知的な精神の動きはなるべく排除して、小鳥のように単純に歌うこと」が本来のあり方であると述べている。魯迅の詩集は『野草』のみであることや、その強烈な感情の噴出は「反省、推理、批判」が後回しにすることが目的であることの参考になる。

(39) 『魯迅『野草』論』 吉田富夫 中国文学報第16冊

『魯迅『野草』全訳』 片山智行 平凡社 東洋文庫541 など

なお片山氏はこの時期の執筆量の低下の原因に、『小説史略』の執筆が絡んでいるのではないかと言及している。

(40) 藤井氏は『呐喊』自序がむしろ魯迅の現在の心境を語っていることが竹内好と丸山昇両名のみが言及したのではないかと指摘し、藤井氏自身も、そして丸尾常喜氏もこのことに賛同している。

(41) 『ロシア歌劇団のために』とこのころの魯迅の心境との関連を重視した論文に、『『呐喊』から『彷徨』へ—民族的自己批評としての魯迅文学その二—』(北大文学紀要26の2 1978)、そして前出の藤井氏の著作がある。

(42) 『ショウとショウを見に来た人々を見る』 『改造』 1933

(43) 『墳』『フェアプレイは時期尚早である』 1925

(44) 『两地書』79 1926

(45) 前出(1)